

在宅医療文化のビデオエスノグラフィー

○神戸市看護大学 榎田 美雄
愛知学泉大学 堀田 裕子
総合在宅医療クリニック 若林英樹
総合在宅医療クリニック 市橋亮一

1 目的

この報告の目的は、従来、医療的関心から評価されがちだった在宅医療のあり方に関して、それを、医療から相対的に自立したものとして、独立した価値を持つものとしてまずは位置づけ、その上で、単にエピソード的に扱うのではなく、裏付けのある形で詳細に明らかにしていくことである。

具体的には、(星野, 2006) (星野ほか, 2010) 等が明らかにしているように、医学における「生活」というものが、医療に関わりのある限りでの位置づけしか与えられていなかった問題をまずは明らかにし、(阿部・榎田・岡田 2003) の提起する第3の道(医療と生活を対置するのではなく、その重なりや相互的な干渉関係そのものを検討の俎上にあげる道)を採用しながら、検討を進める。

2 方法

方法は、ビデオエスノグラフィーを用いる。『応用社会学研究』に掲載された(岡田 光弘, 2008)等で主張されたように、ビデオエスノグラフィーは、新規性のある対象に関して、十分なエスノグラフィックな知識を当事者インタビュー等で確保しながら、ビデオ映像についてのエスノメソドロジー・会話分析の手法での解析を進めていこうとするものである。今回報告するデータに関しては、全国3都市の10カ所以上の在宅医療の現場を撮影して得たものが活用される。

3 結果と結論

分析の結果、在宅医療文化として、3つの質の秩序の存在が判別的に確認された。

- (1) 医療道具の生活化：たとえば、胃瘻カテーテルを2本つないで、鴨居からの距離の長さに対応させること
- (2) 医療的課題の生活化：十人以上の施術者の痰の吸引の技能のレベルを、評論する患者
- (3) 生活全域の在宅医療的再編：リハビリの歩行の場所が楕円であることと相即に行われる半周ごとの休憩

※発表の当日は、動画をもとにした静止画を多用して、上記を解説いたします。

文献

星野晋, 2006, 「医療者と生活者の物語が会うところ」, 江口 重幸・野村直樹・斎藤清二編『ナラティブと医療』, 金剛出版:70-81。

星野晋・沖田一彦・榎田美雄・道信良子・三原祥子・若林英樹・中村千賀子, 2010, 「「準備教育モデル・コア・カリキュラム」への対案作成に向けて:~基本方針~」『第42回日本医学教育学会大会』(ポスター発表配布レジュメ)(2010年7月31日、都市センターホテル)

堀田裕子, 2012, 「社交としての在宅療養場面ービデオエスノグラフィーに基づく相互行為分析ー」『コロキウム』7号:166-187。

榎田美雄 2010, 「周辺への/周辺からの社会学」『社会学評論』61(3)通巻243号:235-256。

榎田美雄, 2011 「医療の社会学」、藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂:12-27。

斎藤雅彦・榎田美雄, 2011, 「医療化する家庭・家庭化する医療」, 『徳島大学 社会科学研究』24